

## 「なりたい自分」についての実践事例による検討

<sup>1</sup> 樽木靖夫 <sup>2</sup> 大日向 浩 <sup>1</sup> 馬場千秋 <sup>3</sup> 川田裕樹 <sup>1</sup> 榊原健太郎 <sup>1</sup> 福田八重

<sup>1</sup> 帝京科学大学総合教育センター  
<sup>2</sup> 帝京科学大学医療科学部東京理学療法学科  
<sup>3</sup> 帝京科学大学こども学部こども学科

Case study about "Ideal myself"

<sup>1</sup> Yasuo TARUKI <sup>2</sup> Hiroshi OOHINATA <sup>1</sup> Chiaki BABA <sup>3</sup> Yuuki KAWATA  
<sup>1</sup> Kentarou SAKAKIBARA <sup>1</sup> Yae FUKUDA

Key words : なりたい自分、職業的意識、自己意識、大学教育、実践事例

### 問題

大学2年生から4年生が受講していた授業で、「1年生の頃、思い描いていた、なりたい自分に近づけていますか」と問いかけたところ、4年生が下を向いてしまった。「自分が何をしたいのかわからない」「このまま卒業してよいものか」といったアイデンティティが確立できていない自己と向き合った上での反応と考えられる。大学進学率が50%を越え、自分探しのためのモラトリアムとしての大学進学も一般的となっている。大学教員も小・中・高校教師に求められるような学生の学びや生き方への指導を視野に入れた教育活動が必要と考えられる。

大学生の職業選択の問題について、松本(1995)<sup>1)</sup>は職業選択過程モデルを提案し、そのすべての段階に、「職業に対する基礎的知識」「職業の労働条件」「職業適性」「生き方」「就職への努力」の要因が影響することを指摘している。森本(2008)<sup>2)</sup>は、職業未決定の状態を捉える目的で、「モラトリアム(やりたい仕事が見つからないなど)」「不安(職業決定に関する焦りや不安状態など)」「模索(様々な情報を集めたり幅広い経験をした後に職業を決めていきたいなど)」の3因子からなる尺度を構成し、職業未決定と自己意識の相互の影響を検討した。その結果、①職業決定に対する焦りや不安、モラトリアムは自己意識に影響した。②自己意識が不明確であることが職業未決定に影響した。このように、職業決定についての意識と自己意識が相互に影響することが指摘されている。また、このような大学生の自己形成に影響する場面として、学業、アルバイト、サークル活動、友人関係があげられており(仲野・坪居,2008)<sup>3)</sup>、それらの活動を通じた友人は、その相談相手として重要

になると考えられる。

これらの先行研究より、職業的意識と生き方や自己を見つめ直すなどの自己意識との相互影響が示唆される。そのため、職業的意識と自己意識を関連づける教育活動プログラムを構成する必要がある。ここでは、職業的意識を自分の職業的な目標や能力が明確になっているか、目標が実現できそうかといった職業に関する自分らしさの意識と定義する。また、自己意識を自分の生き方や内面に注がれる自分のあり方についての意識と定義する。

中学・高校における進路指導は「生き方の指導」といわれるが、学生からの聞き取りからも中学校進路指導主事であった第一筆者の経験でも、中学・高校では進路選択と生き方について統合的に扱うことはできていない。生活経験の少ない中学生に生き方の指導を正面から行うことは発達的に難しい課題でもあった。大学においては、中学・高校とは異なる水準で「生き方」と職業的意識を調和的に統合させることが必要である。

意識下にある考えや気づきを視覚化する方法の一つにマインドマップがある(Buzan & Buzan,2003)<sup>4)</sup>。マインドマップは考えを広げる発想術とそれをまとめる整理術に特徴があり、教育、ビジネス、システム開発への応用が紹介されている(平鍋,2009)<sup>5)</sup>。

そこで、マインドマップを参考にした考えや気づきを図示する方法を用いて、職業的意識と自己意識を統合的に考えさせる課題を実施する。具体的には、「なりたい自分」について、どのような職業を考えているのかという職業的意識とどのような生き方をしたいかという自己意識から考えさせる課題である。

## 目的

「職業的意識としてのなりたい自分」と「生き方に関する自己意識」について統合的に考える課題を設定し、その課題が大学生の自己形成にどのように関与するかを検討する。

## 方法

### (1) 対象

教職科目「生徒指導・進路指導論」を履修し、本課題実施期間に欠席のない2・3年生男子10名、女子7名、計17名を検討の対象とした。

### (2) 課題

「職業的意識としてのなりたい自分」と「生き方に関する自己意識」について自己を対象としてレポートさせる。課題の意図は、○○になりたいといった単純な職業的意識にとどまらず、生き方との関連性で考えさせることである。例えば、教師を希望する場合でも、教師になりたいといった単純な進路希望だけでなく、どのような教師になりたいのか、教師になって何がしたいのかといった水準で考えさせることである。教職科目を履修する学生を対象としているが、就きたい職業は教師である必要はないことをあわせて教示した。

### (3) 課題遂行の援助用具

「なりたい自分」を中心に配置しそれに直接的に関連する考えを基本として、さらに、それに連想するものに枝を伸ばして広げ、それらの中で関連性の考えられるものを結び付けていく方法を第一筆者の「大学卒業時期のなりたい自分」を例に紹介した。

### (4) 手続き

授業において、アイデンティティ形成に注目したエリクソンによる発達理論を紹介した後、本課題に取り組みさせた。図の作成に1回、その修正と図からの文章化に3回、それぞれ20分程度を授業の終わりに4週連続して設定した。このように4週に渡る課題としたのは、それぞれ1週間の期間を空けることで再考させる意図があった。

この課題レポートとその後の授業外での半構造化面接により、大学生の自己形成にどのように関与するかを検討した。男女2名ずつ計4名の学生にプライバシーに配慮して匿名性を保つことを前提に、描いた図、レポートと面接結果を論文データに用いることについて了解を得た。課題レポートの分かりに

くい部分と以下の質問により、第一筆者が半構造化面接を行った。

「Q1. なりたい自分について考えることはありますか?」「Q2. 授業でのなりたい自分の課題は、あなたに、どのような意味がありましたか?」「Q3. なりたい自分について相談できる人はいますか?」「Q4. この課題に対して、図示する方法を紹介しましたが、使いやすかったでしょうか?」の4つの質問であった。それぞれ45分程度の面接を行った。面接への回答内容と学習成績は無関係であることを確認し、自分の素直な考えを面接で表現するように求めた。面接対象は、教職への動機と動物への興味を統合するプロセスを検討するのに適切と考えられる男子Aさん、なりたい自分を見直した上での進路変更のプロセスを検討するのに適切と考えられる男子Bさん、複数の職業的関心から職業を絞り込む渦中にあるプロセスを検討するのに適切と考えられる女子Cさん、なりたい自分を考える過程で家族との葛藤状況に気づいた女子Dさんとした。

## 結果と考察

### 1. 全体的傾向について

今回の調査では大企業や有名企業への就職希望をあげる学生はおらず、生きがいや興味のあることで生計を立てたいとする者が17名中16名みられた。残り1名は、先のことはまだ考えられないとしていた。希望職種は、教職11名、動物関係5名、サービス業3名、公務員5名、人間に関わる職業2名、研究職1名、不明1名であった(複数回答)。さらに、教職を考える動機として、学習指導が11名中8名、生徒理解2名、不明1名であった。

### 2. 実践事例の検討

4名それぞれの事例を検討し、その結果を示す。小見出しは第一筆者がつけた。

#### (1) 大学入試で世話になった教師をモデルとした教職志望 A さんの事例

図1にAさんの描いた図を示し、以下にその事例を整理した。Aさんは高校生の頃、動物関係の仕事を考えていた。さして考えずに獣医学科を受験したが合格できなかった。はっきりした獣医への希望ではなく、動物好き=獣医といった単純な考えであったことを反省した。高校での放課後や土曜の学習会で勉強に励んだ結果、大学に合格した。この時期、世話になった先生のことを考えて、教職という仕事に興味を持ち始めた。教師になったときに、

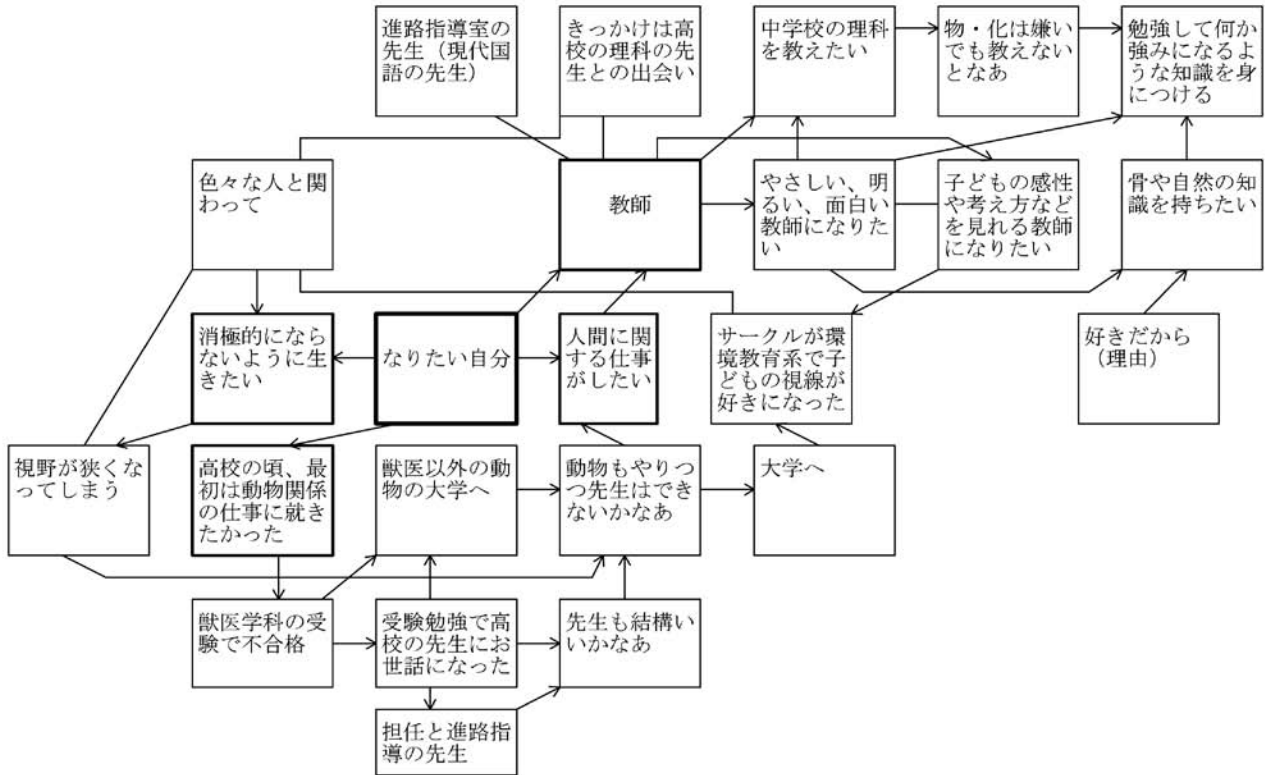


図1 Aさんの描いた図

教科書を越えた知識を提供できるきっかけになると考え、大学入学後に、動物介在教育や環境教育のサークルで活動している。

以上のようにAさんは、憧れた先生をモデルにしながらも、動物介在教育や環境教育などの自分の興味を加えて、教職という職業的意識と動物に関わりたいという自己意識の統合を目指していると考えられる。「なりたい自分」の課題レポートや描いた図は、教職への動機を探ったり、自分の多様な背景がどういう教師になりたいかに影響していることを理解するのに有益であるとしている。また、相談相手として、進路希望は異なっても大学での友人が役立つと報告している。

(2) なりたい自分を見直し進路変更したBさんの事例

図2にBさんの描いた図を示し、以下にその事例を整理した。Bさんは一度は調理師を目指した。専門学校で調理法について学ぶとき、「なぜ」「どうして」と質問すると、「これはそう決まっています」と回答されるだけであった。そこで、「なぜか」の問いに回答を探せることが重要だと気づき、進路を変更した。

自身の高校生活では学校生活に外れた生徒に対する学校側の理解が低いと感じ、窮屈な思いをした。

フットボールを懸命にやっていたBさんを受け入れてくれた理解者としての顧問教師の存在に気づいた。自身のような道から外れそうになる生徒の理解者になりたいと思った。このような理解者が今、社会に必要なのではないかと考えている。

これらの動機より教職を目指そうと考えている。なぜかを問いたい生き方としての側面と学校生活から外れた生徒の理解という経験的な側面を統合して教職に結びつけている。「なりたい自分」の課題レポートや描いた図は、「今の自分がなぜあるのか」という立ち位置を整理するのに有益であると報告している。また、相談相手として、中学時代からの友人をあげている。

(3) 活動することで自分の適性を知ろうとするCさんの事例

図3にCさんの描いた図を示し、以下にその事例を整理した。Cさんの大学受験時の志望先は福祉系、教育系、動物系の3つであった。AO入試のために調べ学習や福祉施設への見学などの準備をした。現在は動物を介在させる福祉と教育に興味をもち、いずれの方向に進むのか思案中である。入試準備のように、自身で体験して学び、選択する方法が似合うと捉えている。そのため、大学でも、野生



物研究、動物介在教育、バドミントンなどのサークルで活動しながら、自己の興味や適性を見極めようとしている。つまり、福祉や教育についての職業的意識と活動することで自己の適性を見極めようとする自己意識を統合して、大学生活を送っていると考えられる。また、誕生日や成人式など大人になったと感じる時、尊敬する人の生き方に憧れる時、人の生涯を描いた映画やドラマを観た時にも、自分の生き方を見つめ直すことがあるという。

この課題は、これまでの自分の生き方が整理できて楽しく、その理解にも有益であると報告している。また、相談相手として、中学、高校、大学での友人をあげている。

(4) なりたい自分を考える過程で家族との葛藤状況に気づいたDさんの事例

図4にDさんの描いた図を示し、以下にその事例を整理した。Dさんはヒトの生殖細胞についての関心が高い。しかし、大学院への進学が可能かなどの現在の自分の立ち位置を整理することで、研究職に就くことの難しさを感じている。教えることの面白さを理解する反面、これまでの友人関係を通した人と深くつき合うことへの抵抗感から、教職に興味

をもちつつも対人関係への不安も感じている。

さらに、母親の期待や過干渉が負担となり、自身と母親の自己形成のために、親からの独立の課題も見いだしている。以上のように、職業的意識と生き方に関する自己意識を統合して、自己の課題として捉えている。

この課題により、自分の考えが家族との関係に影響されていることを改めて理解した。これまで、それぞれの課題について単独で考えていたことを関連づけて整理するのに有益であるとしている。また、友人との関係づくりの難しさを報告し、相談相手を異性のパートナーとしている。

なりたい自分に対する現在の行動についての言及はみられないが、自己の課題は整理されている。そのため、課題解決の方向を自己決定できれば、Dさんは具体的に行動できると考えて、広がりをもたせて職業に結び付けて考えることを面談時に提案した。具体的には、教育学部でありながら教師にならず教材会社に就職した学生、幼児教育を専攻しながらも保育士にならず絵本の編集者になった学生など、自分の興味や専門性を活かしながらも、アプローチを変えてなりたい自分を模索した過去の学生の例について伝えた。

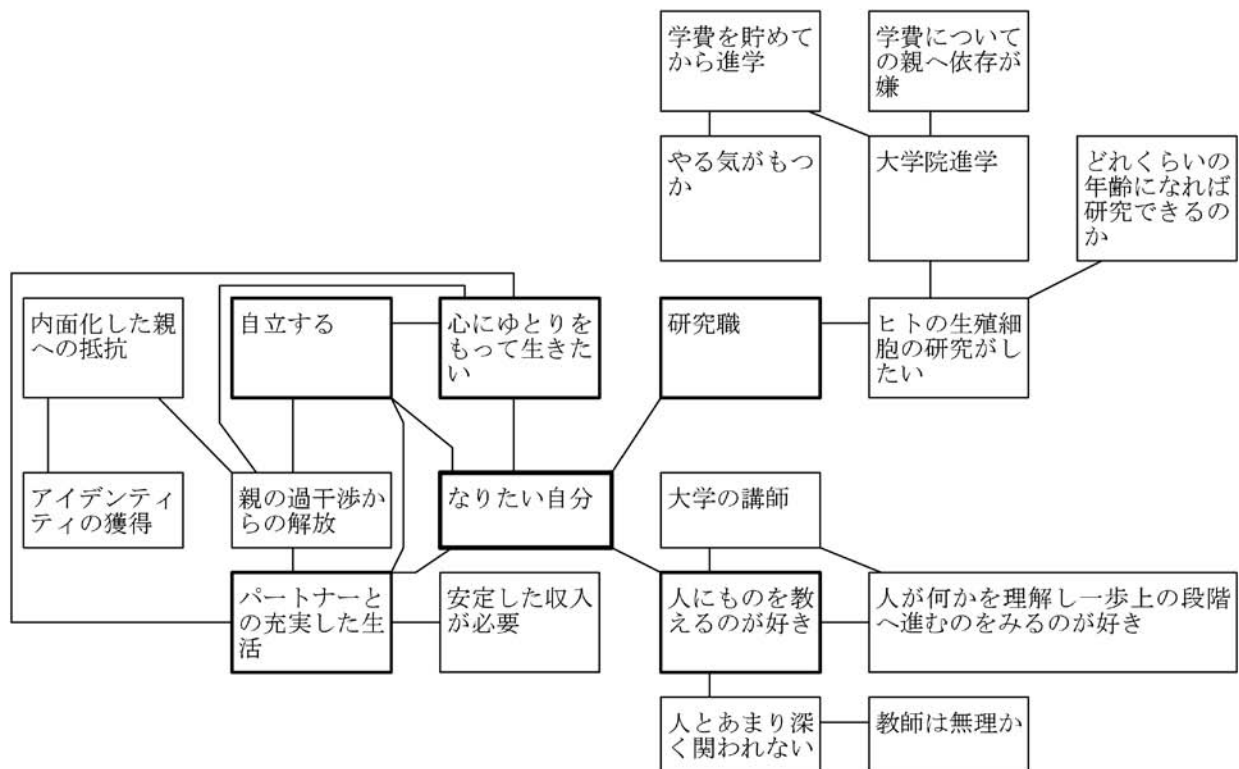


図4 Dさんの描いた図

## 総合考察

### (1) 職業的意識と自己意識の統合

面接した4名の学生はいずれも、なりたい職業やなりたい生き方について部分的に考えることはあるとされていた。それらをどのように統合するかを考える機会として、この課題が有益であることが報告された。

Aさんは、憧れた教師をモデルにしながらも、動物介在教育や環境教育などの自分の興味を加えて、教職という職業的意識と動物に関わりたいという自己意識の統合を目指していた。Bさんは、なぜかを問いたい自己意識と学校生活から外れた生徒を理解できる教師という職業的意識を統合して教職に結びつけていた。

Cさんは福祉や教育についての職業的意識と活動することで自己の適性を見極めようとする自己意識を統合して、大学生活を送っている。Dさんは研究職と教職に興味を持ちつつも、それぞれの方向への課題に悩み、さらに、親からの独立の課題も見いだしている。このように、職業的意識と生き方に関する自己意識を統合して、自己の課題として捉えている。以上のように、職業的意識と自己の興味や体験などによる自己意識を統合した「なりたい自分」について報告された。

### (2) 「なりたい自分」について考えるきっかけ

「なりたい自分」について考えるきっかけとして、次の4点で整理することができる。

#### ① モデルとなる人との出会い

A、Bさんが世話になった教師は、職業として教師を考える際の重要な動機になっている。また、Cさんは尊敬できる人との出会いが生き方に影響すると報告している。

#### ② ライフイベント

Bさんは自分の生き方を求めた進路変更というライフイベント、Cさんは誕生日や成人式など自分が大人になったと感じるライフイベントを「なりたい自分」について考えるきっかけとしている。

#### ③ 本、ドラマ、映画などの仮想的な刺激

Cさんは本、ドラマ、映画の登場人物と自分を相対化して「なりたい自分」について考えるきっかけとしている。

#### ④ 自身の興味のあり方

興味のあり方は4名全員にあてはまるが、Dさんにはその影響を強く感じる。Dさんはヒトの生殖細胞の研究者を希望し、どうしたらなれるかの遠い道のりに悩んでいる。

### (3) 課題レポートや図示する方法の有用性

この課題は、4名とも、部分的に考えていた職業的意識と自己意識を統合して考えるのに有益な機会であるとしている。特に、図示する方法を用いてこれまでの自分の生き方を整理することが楽しめたというCさんの発言には注目できる。

### (4) 「なりたい自分」を考えるとときの相談相手

男子学生Aさん・Bさんと女子学生Cさんは、相談相手として友人をあげている。女子学生Dさんは友人を否定し、異性のパートナーをあげている。青年期の友人関係には性差があることが知られており、女性は男性よりも相互依存や自己開示を友人関係に期待し(和田,1996)<sup>6)</sup>、密着した関係を求めることが指摘されている(長沼・落合,1998)<sup>7)</sup>。そのため、女子学生には男子学生と異なる友人関係構築の難しさが考えられる。Dさんのように友人関係に否定的な経験をもつ女子学生は、友人関係を構築することそのものに困難を感じ、相談相手として友人を選ばないことも理解できる。しかしながら、面接した印象からはDさんに孤独な印象を感じることはなく、自己開示の対象をもっていることが重要と考えられる。

中学・高校の友人をあげた男子学生Bさんは、専門学校・大学の友人には、岡田(1995)<sup>8)</sup>が指摘する、本音で関わり合えない友人関係しか構築できていないのかも知れない。今回の調査では、そこまでの聞き取りは行えていない。つまり、「なりたい自分」を考えるとときの相談相手がいることの重要性は示唆されたが、それが大学の友人である必要性について言及することはできない。

### (5) 今後の課題

本課題は複数の教職科目の授業での関わりを経て、学生と教員の信頼関係がある程度、築かれた時期に行い、学生へのサポートも可能な状況で意味を持つ可能性がある。具体的には、面談時に興味を中心から広がりをもたせて職業を再考する提案がDさんになされた。従って、本課題をそのまま、他の対象や他の授業に組み入れることについては、更なる検討が必要である。また、本課題の実施時期としては、就職活動が始まる前の2年後期から3年前期に行うことが有用と考えられる。今後は、大学生の「なりたい自分」についての相談相手も検討する必要がある。

## 引用文献

1. 松本卓三：男子大学生の職業選択過程に影響を及ぼす諸要因の検討．進路指導研究，16（1）：10-15, 1995.
2. 森本文子：大学生における職業未決定とアイデンティティの関連．九州大学心理学研究，9（1）：205-213, 2008.
3. 仲野好重・坪居康仁：学生生活の満足感とアイデンティティ形成の間をつなぐもの－充実感からのアプローチ－．大手前大学論集，9（1）：227-252, 2008.
4. Buzan, T. and Buzan, B : *The Mind Map Book* (Rev. ed.) . BBC Books , London , 2003.
5. 平鍋健児：マインドマップによるアイデア発想と整理術．情報の科学と技術，59（10）：498-504, 2009.
6. 和田 実：同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連．心理学研究，67（3）：232-237, 1996.
7. 長沼恭子・落合良行：同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係．青年心理学研究，10（1）：35-47, 1998.
8. 岡田 努：現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察．教育心理学研究，43（4）：354-363, 1995.